

仏様のおはなし新シリーズ第64集 その2 「浄土真宗の法事とは」

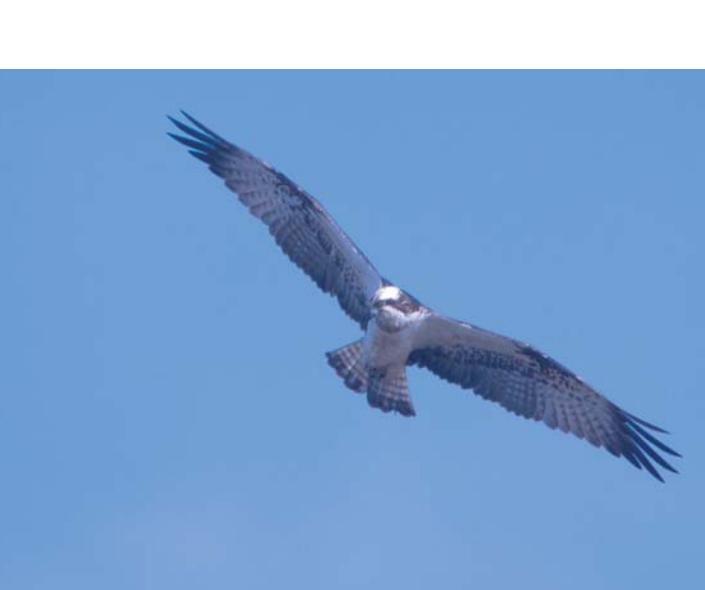
御門徒さんの法事に参った時に、そのお勤めのあとで、「亡くなつた父も喜んでいることと思ひます」「ずっと気になつてましたのですが、これで気が安らぎました」などと言われことがあります。どうやら追善供養のためにご法事されていましたようです。あるいは義務的に考えているようにも聞こえています。

『歎異抄』第五条に「親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念佛もうしたること、いまだそうちわづ」とあります。親鸞聖人は、追善供養のため念佛したことではないと言つて いるのです。

では、淨土真宗におけるご法事にはどういう意味があるのでしょうか。ご法事のお勤めの最初に表白(ひょうびやく)を読みます。表白には、このご法事はどのような意味で勤めるのかが含まれています。私がよく用いる表白の中に次のような一節があります。

「その遺徳は今もなお 私どものうえに はたらき続けてこのような法縁が与えられました はるかに故人の遺徳を偲んで 聽聞に精進し お念佛を相続して やがては 安養の淨土に生まれさせて頂いて ともに 相まみえることができます」

ご法事をつとめるのは、亡き人の命日をご縁とし、亡き人を偲びながら、阿弥陀仏のみ教えに遇うためのご縁なのです。阿弥陀仏のみ教えに遇つて聞法することです。ご法事のお勤めにあうことは、まさに法を聞くということです。亡き人がその人の生き様を通して私に何を伝えようとしていたか、それを私ははたして受け取つて いるかを確かめるご縁が私に与えられることが、それがご法事に遇うということの意味なのです。



私たちは、亡き人から仏の教えを、身をもつて教えていただいているのです。そのことに私たちが気づいたとき、亡くなつた人は仏様といただけます。そして私たちの往くところは阿弥陀仏の淨土です。けして六道輪廻する迷いの世ではありません。亡くなつた人を仏様といただくか、亡者とするかは、ひとえに私にかかるのです。追善供養ではなく、南無阿弥陀仏のみ教えに遇い、お念佛申させて頂くことなのです。担当は真福寺住職でした。